キトラ古墳誕生を支えた人々

京都橘大学　名誉教授
猪熊　兼勝

一九八三年十一月七日正午前、蛇の目を思わせるファイバースコープのレンズは小墳丘の石室床を這いずりながら、内部を映し始めた。考古学のデーター採集である発掘作業は、土中の堆積土を除去し、過去の人が構築した遺構を学術的に掘り出すことであるが、キトラ古墳は発掘せずに古墳内部を調査できた最初である。まさに考古学調査法の歴史を変えた革命的な瞬間であった。つまり発掘をする前に土中の様子を把握できたのである。出産前に胎児の状況が分かる医学と似ている。間もなく、モニターの画面に白い漆喰を塗った壁が映った。マルコ山古墳と同じ構造の石室であった。長さ六メートル、直径一センチメートルの管は四方に付けたピアノ線の操作で鎌首を上げた。坪井清足、直木孝次郎、網干善教先生と私のほか、飛鳥古京顕彰会の吉田信秀会長さんらが固唾をのんで見守るなか、奥壁の上部でQ字形の図形を捉えた。誰しも「ゲンブ・玄武」の文字が脳裏を走った。

ことの起りは、その十年前の高松塚古墳に戻る。極彩色の壁画発見以来、明日香村内の考古学愛好家の飛鳥古京顕彰会によってポスト高松塚探しが始まっていた。高松塚古墳近くの桧前に住む上田俊和さんは、高松塚古墳西北一キロメートルの地ノ窪集落で版築積の古墳があることを突き止めた。マルコ山古墳の発掘は、報道陣の注目する騒動となっていた。網干、菅谷文則さんとともに私も調査員であったが、ある日の昼休み、上田さんから散歩に誘われた。「阿部山の人から、あのような古墳が、私の集落にもあると言われたのやけど」と案内されたの

上田俊和さん

堀田謹吾さん（堀田暁生氏提供）

が、道端の崖淵にある小さな盛土だった。斜面に排水溝の断面らしき小石溜が見える。古墳らしい。聞くと、この場所はキトラと呼んでいた。その訳は集落の隅で「北浦」の意味だと教えられた。

八一年、考古学の月刊誌『考古学ジャーナル』一九四号に、「飛鳥時代の古墳」としてキトラ古墳に触れたが、関心を持つ人はいなかった。八三年、兵庫県加西市の古法華の石仏で複製作業をしているところへ、ＮＨＫの歴史番組で活躍されていた堀田謹吾さんが来られた。発掘せずに遺跡調査をする番組への協力要請だった。堀田さんは、「未来への遺産」でエジプトのピラミットを紹介され、高松塚の番組も手がけられていた。晩年には金大中韓国大統領のドキュメントなど幅広い活動を思い出す。それは東京電気通信大学の鈴木務先生の協力で、電磁波で地下の遺跡を調査する主旨だった。「そんなこと出来るのだろうか」と思った。飛鳥資料館の前庭にある飛鳥時代の石組溝や都塚古墳などで探査を繰り返していた。そこで顕彰会の吉田さんの要請もあり、キトラ古墳で試みることになった。地元の測量会社に依頼し、墳丘周囲を百分の一の縮尺で実測図を作製すると、北を上に桃実形をしていた。南の窪みは盗掘痕跡と思えた。すでに、この盛土を古墳と解釈した先人がいたのだ。この図面に方眼のメッシュを刻み、電磁波を試みると、漠然と南北に長い高松塚級の石室らしき痕跡を捉えた。「やっぱり古墳だった」が実感だった。

吉田信秀さん（吉田勝秀氏提供）

話を探査当日へ戻そう、盗掘場所と思われる南扉位置から探査に着手した。三万画素のグラスファイバーを束ねた先にレンズを付けていた。ガイドパイプは盗掘穴を貫通していた。その流入土が床一面に広がり、ファイバーが画面一杯に広がる土塊の間を進んだ。這いずるレンズから蛇の視界を想像した。モニターの横線が走る画像は不鮮明であったが、画像は奥壁を上へなめ出すと、中央にQの画像が映った。「玄武」の声、高松塚の経験からQの意味を熟知していた。ファイバーを操作する技術の金井清昌さんに右（東）へと叫んだ。そこには人物像や青龍があるはずだ。ピアノ線が操作され画面が移動した。テープを交換する僅かな間、ＮＨＫ奈良局の武野和之カメラマンが別のカメラでモニターの赤い痕跡を

写していた。何だか分からなかった。この赤い痕跡の理由が分かるのは、十八年後である。さらに右へと操作した瞬間、モニターが丸い残像を残しながら崩れていった。レンズが外れたのだ。ため息が漏れた。

二つ目の壁画古墳があった興奮と、カメラの故障の無念さが交錯した。四日後、「NHK特集・発見・飛鳥の壁画古墳」として、現場中継を加えて放送された。大きなニュースとなった。人々の関心は、新しい壁画古墳に集中した。考古学では、こうしたことが起ると、必ず批判する人が現れる。「ファイバースコープによる盗掘ではないか」や、行政からも「厄介なものを見つけてくれた」の苦言を戴いた。

私はNHK技術研究所へ呼ばれ、技術的な改良点を聞かれた。「地面を這うスコープを空中で停止させ、レンズを全球体に回転できることと、撮影した画像の寸法を測定できるようにして欲しい。」と要望した。一年後、この夢は叶えられた。だが新たな障害が生じる。

明日香村の人々は、高松塚古墳以来、多くの観光客で生活のテンポに異変を生じることを痛感していた。マルコ山古墳の調査は、多くの報道関係者が押し寄せ、集落へ入る道路の機能が不能となり、観光客が田畑に足を踏み入れる事態も生じ、遺跡調査に苦情が寄せられた。キトラ古墳際の道は阿部山集落の唯一の生活道であった。そのため、探査の続行は不可能になった。

古墳の盛土は一三〇〇年の歳月で痩細っていた。毎年、台風シーズンになると、明日香村文化財課の納谷守幸さん、上田さんと三人でシート被せに追われた。納谷さんは病気をおしてきてくださった。なによりも大雨によって、墳丘が道路へ落下することを危惧した。そんな時、阪神淡路大地震が起る。文化庁の指示で高松塚古墳内壁の漆喰剥落のないことを確認したが、キトラ古墳は確認しようがなかった。吉田さんは「私の生きているうちに探査して欲しい」が口癖になっていた。「お墓に報告に行きますよ」と冗談に言っていたが、やがて現実になる。

懸案だった阿部山集落へ西の高取町から新しい道路が開通した。十五年ぶりに、キトラ古墳の内部探査を再開しようとする気運がおこり、調査団が結成された。けれども機材を提供していただける報道機関がなかった。前回、全面的に協力されたNHKからも良い返事をいただけなかった。度重なる交渉の結果、分かったのは、NHKの関係者が異動などでいなくなっていた。新しくプロデューサーの田辺雅泰さんが担当者となったが、驚いたことに、ファイバースコープの時代ではなく、超小型カメラに代わっていた。田辺さんは、あらゆる面で苦労された。なかでも探査の全面公開を要求する他の報道機関への対応は大変だった。全ての探査映像を中継で公開することになった。もうNHKは番組を独占できなくなっていた。

田辺雅泰さん

九八年三月五日、朝から阿部山の集落は緊張していた。古墳の脇には調査団・村関係者・報道機関のテントが三張ならび、古

墳からケーブルが繋がった。定年を延長された金井さんがカメラを操作していた。標準レンズを付けた四十万画素のカメラは、奥壁の玄武を捉え、左右の両壁にも移動したが、白い壁のところどころに酸化鉄を含む雨水による茶色の滲痕が明瞭に映った。壁画探しが探査目的ではないと自覚しながらも、やはり落胆は隠しきれなかった。終了予定の時間は迫っていた。金井さんは最後に予備の望遠レンズに換えた。カメラは、北から西壁をなめだすと、突然、縦位置に墨線が映りだした。白虎の首のはずだが顔がない。瞬間、調査団からどよめきの声があがった。白虎が潜んでいたのだ。しかも顔が反対方向で‥。玄武だけの壁画と思った時もあったが、やっぱり四神像を描いていたのだ。狩猟で俊敏な虎を射止めた感がした。

興奮冷めやらぬなか、モニターは天井に移っていた。白い天井に複数の黒い弧線と、朱線で繋がれた円い金の星が点在する。高松塚古墳の天井は、天子星の北斗七星を中央に、四方に各方角を示す七星があり、全て二十九星宿を描いていた。私は、この星宿を理解するため、円周内に天文図を描いた中国南宋時代の淳祐天文図を持っていた。目の前に展開する星座は、現存最古の淳祐天文図と同じ構図ではないか。この古墳は七世紀なのに‥、全く予期しない天文図だった。充分に理解できないまま、東アジア最古級と表現をした。後日、同志社大学の宮島一彦先生から世界最古と教えられた。現在では、高句麗の夜空を描いた原図が舶載されたと考えられている。

東壁は茶色の汚れだけであったが、釣り針状の青龍の舌を捉えていた。全ての画像は、盗掘穴から入ったカメラで撮影の、南を手前とする斜めアングルだった。そこで画像解析で名高い東海大学情報技術センターの坂田俊文所長のもとで、正面画像に修正された。

高松塚古墳は壁画発見以来、これまで考古学の世界では考えられなかった異分野との学際的な研究が進み、あらゆる分野の研究で検討され、もはや新研究の余地はないと思われていた。そんな時、キトラ古墳の登場は、高松塚古墳にも新しい息吹を吹き込んだ。両古墳を対峙し、微妙な違いが、飛鳥時代の詳細な変化を把握するデーターとなった。これには正位置の画像は有効な役を果たした。キトラ古墳が四神塚と判明以来、誰しも期待したのは、朱雀像である。白虎像を捉えた時、金井さんにレンズを手前に廻して欲しいと頼んだが、壁を傷つけそうなのでだめだった。

二〇〇一年三月、これまでＮＨＫ、明日香村と調査を引き継がれてきたが、文化庁による調査となった。充分な撮影機材がないなか、写真担当の奈良文化財研究所の井上直夫さんは、安価であるが高性能の百万画素のデジタルカメラの改造を試みた。調査団が固唾をのむなか、前後に合せたカメラは、朱雀を捉えた。石室扉の内側で、か

坂田俊文先生（東海大学情報技術センター　提供）

ろうじて盗掘口を外れた「火の鳥」だった。地上を助走する雄雉を思わせる華麗な真横姿である。目は「人間の目」をした鶏と雉の合体した朱雀である。他の三神像も斜め横姿であるが、隋唐、高句麗の壁画古墳に類例があるものの、朱雀には真横姿がない。他の三神像に合せて横姿にしたのかもしれない。なかでも朱雀は、濃淡を強調した自由な筆裁きが指摘されている。多くの人の目に晒されない扉の内側に、絵師は自慢の腕前を発揮したと思いたい。高松塚古墳にはどんな朱雀が描かれていたのだろう。

この年の十二月、精度を改良したカメラを投入した。そこで最初の調査でモニターに走った朱線の謎が解けた。東壁の下位置に十二支の人身寅像が描かれていた。身体には朱色の合襟で広袖の袍を着ている。この寅像と四神の白虎像は顔立ちが異なる。用途ごとに集められた原図の違いであろう。大宝令の衣服令の礼服は広袖の袍と思われるが、具体像の資料はない。十二支像について、百橋明穂氏は隋代を初現とされる（「キトラ古墳壁画の美術史的位置」仏教芸術二九〇）。それは広袖の袍に笏を持つ。朝鮮半島では、七世紀末、新羅の龍江洞古墳から出土した銅製十二支像が古く、上半身裸である。王陵の外護列石に浮彫した十二支像は、基本的に鎧で武装し、八世紀の統一新羅時代が初現である。そうだとすれば、東アジアにおいて、キトラ古墳の十二支像が、袍を着て、武器を持つスタイルの最古像となる。果たしてそうだろうか。キトラ古墳の壁画は輪郭をヘラで転写した圧痕がある。おそらく原本があったのだろう。これに良く似た武器を持つ神将像として当麻寺金堂の四天王像がある。鎧下の衣服は円領の広袖で、両手に武器や仏具を持つ。全体に補修部が多いが、基本的な形態は、当初の七世紀末とされる。その源流について、田辺三郎助氏は六世紀前半の梁代の影響を受けると指摘されている（「大和古寺大観二　当麻寺」）。十二支像への転換は、可能であったのであろう。キトラ古墳は、高松塚古墳とともにルーツを辿れば、六世紀後半の北斉・婁叡墓（ろうえいぼ）にたどり着く。近年、山田寺出土の三彩土器も北斉で製作されたことが明らかになった。キトラ古墳の十二支像は飛鳥文化の源流の一端を示している。

韓国新羅では、四天王寺跡の塔階段耳石に塼仏であるが、弓を持つ武装の四天王像がある。王陵の外護列石の十二支像へ影響を与えており、造形的に両者は無関係ではなかろう。北斗七星を中心とした天文図、四神像、そして十二神像で装飾したキトラ古墳のデザインは、奈良時代になり十二支八卦背円鏡に置き換えられ、正倉院に伝わる。王権のシンボルとなった。

歴史に「モシ」は禁句である。しかし三十年前、上田俊和さんが、古墳と気付かなかったら、堀田謹吾さんが奇想天外な番組を企画しなかったら、吉田信秀さんの思いがなかったら、納谷守幸さんの闘病を押した献身的な活動がなかったら、阿部山の小古墳は、まだ静かに眠り続けていたのだろう。

残念なことに網干先生、堀田・吉田・納谷さんは亡くなった。キトラ古墳は、先端科学の申し子として誕生した。その後の経過は、万全の体制で先端技術による開腹手術を受け、応急的にも壁画の保存に結び着いたのは奇跡であった。今やキトラ古墳無くして飛鳥の文化は語れない。

（二〇〇六年五月朝日新聞奈良版に六回連載「回想キトラ古墳」に加筆）

※こちらに使用している画像及び文章等の無断転載・使用はご遠慮ください